

金子みすゞへの旅

島田陽子

前橋市立図書館

☎(0272)24-4311



0113261176

金子みすゞへの旅

島田陽子

編集工房ノア

金子みすゞへの旅

一九九五年六月七日第一刷発行

一九九五年八月一七日第二刷発行

著者 島田陽子

発行者 涸沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市北区中津三一七一五

電話〇六(三七三)三六四一

FAX〇六(三七三)三六四二

振替〇〇九四〇一七一三〇六四五七

印刷製本 日本電植株式会社

©1995 Yoko Shimada

0095—9511—7641

不良本はお取り替えいたします

島田陽子(しまだ・ようこ)

一九二九年東京生まれ。

日本現代詩人会、日本童謡協会、詩と音楽の会会員、
帝塚山学院大学及び同短期大学講師。

詩集『ゆれる花』『北摂のうた』(以上ポエトリ・センタ
ー)『共犯者たち』『童謡』『森へ』『大阪ことばあそびう
た』『続大阪ことばあそびうた』(以上編集工房ノア)『日
本現代詩文庫・島田陽子詩集』(土曜美術社)『家族』(か
ど創房)童謡集『ほんまにほんま』(共著・サンリッド／
第十一回日本童謡賞受賞)童謡集『海のポスト』(手鞠文
庫)レコード『世界の国からこんにちは』など多数。

金子みすゞへの旅――目次

死へ傾斜する童謡——下関

みすゞの風土——仙崎

仙崎再訪

海と父と

結婚と破局

見えないものへの関心

伏せられたこと

旅の終わりに

*

あながき

152

136 113

96

83

59

49

28

6

装幀
森本良成

金子みすゞへの旅

死へ傾斜する童謡——下関

童謡詩人・金子みすゞ（本名テル）は、山口県大津郡仙崎村・現長門市仙崎で生まれた。明治三十六年（一九〇三）四月十一日のことである。

明治生まれの女性といえ、先ず思い出されるのは「みだれ髪」の与謝野晶子（明11年）であり、「青鞥」^{せいとう}の平塚らいてう（明19年）である。さらに深尾須磨子（明21年）、高群逸枝（明27年）と続き、みすゞと同年生まれに林芙美子がいる。今年（一九九五）二月に亡くなった詩人・永瀬清子は明治三十九年生まれた。

いずれも、男性中心社会の抑圧に苦しみながらそれをはね返し、際立つ個性で輝かしい光芒を放った。

彼女たちにくらべると、童謡の世界でこそみすゞは華やかな存在だったが、実生活では

市井の女のひとりとして、山口県から出ることなく短い生涯を終えた。同じ三十六年生まれながら、はじめから粹をはみ出していた林美美子と異るのはその点である。そして私の母もまた明治三十六年生まれで、私が母とみすゞをどこかで重ね合わせてしまうのも、同じく家父長制下、自我を殺し忍従した女だったからである。だが母は、みすゞのように生きた証しは何ひとつ残さなかった。それが多くの女たちの在りようだった。

金子みすゞは、しかし、死後忘れられ、埋もれた。が一九八四年(昭59)、『金子みすゞ全集』(JULA出版局)出版を機によりがえったのだ。みすゞの生地や、ゆかりの土地を訪ねたいという思いが、いつからか私の中で育っていた。

一九八七年(昭62)の六月初旬、私は思いきつて旅に出た。岩波文庫の『日本童謡集』で、みすゞの「大漁」に出会ってから十数年、『金子みすゞ全集』を手にしてからでも三年たっていた。

みすゞの故郷、長門市は、「海上アルプス・青海島おうみじま観光」の地として知られているが、郷土詩人の蘇りに活気づいた。みすゞを愛する人たちが集まって「金子みすゞ顕彰会」を設立した。みすゞが幼い頃からなじんできた海や島、港、神社、寺などを、「仙崎八景」としてうたった所に詩碑も立てた。

また、みすゞが二十歳から暮らし、そこで死去した下関市にも「みすゞ会」ができて、毎月十日（みすゞの命日、三月十日にちなんで）の夜、集まりが持たれている。みすゞが主に創作の場とした上山文英堂書店商品館支店跡近くの、広島相互銀行前には、みすゞの略歴を記したパネル碑が立っている。

下関を案内して下さったのは「みすゞ会」の世話役をしておられる大島聡子さんと、会員の久恒けい子さん、それに後述する北九州市の西田春作氏である。真夏のような陽ざしの午後の町を、汗をふきふき歩いて下さった三人と、私との間にはそれまで何の縁もなかった。金子みすゞの人と作品を愛しているという、ただそれだけのつながりで、気まぐれな一旅行者のために時間をさいて下さったのである。

私はなぜ、金子みすゞにこだわるのだろうか。

そもその発端は、岩波文庫『日本童謡集』で見たみすゞの作品「大漁」だった。

朝焼小焼あさやけこやけだ

大漁たいりやうだ

大羽鰻おおばいわしの

大漁だ。

浜は祭のはままつり

ようだけれど

海のなかでは

何万のなんまん

鰻のとむらいいわし

するだろう。

——『童話』大13・3

これは同集にのったみすゞの唯一の作品だが、私は衝撃をうけ心を激しくゆさぶられた。詩は見えないものを見なければならぬ。みすゞは浜の賑わいの向こう、朝焼けの海の中を見ている。来る日も来る日も仲間を大量に失ってゆく魚の悲しみを見ている。それが「鰻のとむらい」というイメージを引き出したのだが、私はこの「鰻のとむらい」という言葉にとらわれたのだった。「とむらい」という言葉は現在にはあまり使われない。また「鰻」という字もめったに見ない。日常から遠い二つの言葉が私の目と耳に与えたものは、異界じ

みた妖しきであり、それが持つ不思議なひびきであつた。作者はどんな女性だろうか、とチラリと思つた。それきり忘れるともなく忘れてしまつていた。

改めて『金子みすゞ全集』を手にした時、「大漁」から受けた感動が、いや、それ以上の衝撃が私を打つた。明治三十六年生まれの子金子みすゞは、二十歳からの五年間に五百篇余りの童謡を書き、昭和五年、二十六歳で三歳の一人娘を残して自死してゐたのだつた。この全集は童謡・童話作家の矢崎節夫氏が、大学時代にやはり「大漁」に感動したことから世に出ることになつた。忘れてしまつた私とちがつて氏はそれから十六年間、金子みすゞを追ひ求めた。いわば運命的な出会いをしてしまつたこの人の執念によつて、金子みすゞは私たちの所へよみがえつたのである。そしてまた、もしこの全集が出なかつたら、私の金子みすゞとの縁は「大漁」一篇のみで消えてしまつていたのだ。私は全集と出会い、みすゞの死と作品との関連性について私なりの一つの発見をした。

みすゞは五百篇余りの作品中、タイトルに「とむらひ」のつくものを四篇、「墓」のつくものを五篇、書いていた。前記『日本童謡集』には、百田宗治の「お葬とむらひい」という詩がある。発表も同じ大正十三年である。だが、『日本児童文学大系』（ほるぷ出版）に収められてゐる一一三七篇という膨大な量の白秋童謡に、「とむらひ」のつくタイトルは一篇もないの

だ（「駒鳥のお葬式」というのがあるが、これは『マザー・グース』を訳したもので例外といえる）。みずゞにはその他、「お坊さま」「巡禮」「報恩講」「お佛壇」「佛さまの国」「鯨法會」「燈籠ながし」等、仏事への関心の強さを示すタイトルの作品が多い。これは何を意味しているのだろうか。

お葬とむらひごっこ、

お葬とむらひごっこ。

堅ちゃん、あんたはお旗持ち、

まあちゃん、あんたはお坊さま、

あたしはきれいな花もつて、

ほら、チンチンの、なあも、なも。

そしてみんなで叱られた、

ずるぶん、ずるぶん、叱られた。

お葬ひごっこ、

お葬ひごっこ

それでしまひになつちやつた。

「お葬ひごっこ」という詩だが、子どもにとってはお葬式は祭りだし、遊びの対象に十分なり得るものだ。みずゝは「にぎやかなお葬ひ」でも「明るい、明るい、春の日です。／とても見事なおとむらひです。／なん百といふ花輪の花は、／明るい明るい空の下で、／みんなみんな嬉しそうです。」と、子どもの側に立つてその楽しさをうたっている。が、「おとむらひの日」では、よそごとでなくなつたお葬式がうたわれる。

お花や旗でかざられた

よそのとむらひ見るたびに

うちにもあればいいのにと

こなひだまでは思つていた。

だけでも、けふはつまらない

人は多ぜいあるけれど

たれも對手にならないし

都から来た叔母さまは

だまつて涙をためてるし

たれも叱りはしないけど

なんだか私は怖かつた。

お店で小さくなつてたら

家から雲が湧くやうに

長い行列出て行つた。

あとは、なほさらさびしいな。

ほんとにけふは、つまらない。

お葬式といい、墓といい、死につながる仏事への関心は、一体どこからきているのか。

勿論、みずゞ童謡はこうした系統のものだけではない。子どもらしい夢や、喜び、母への

愛、けんかやお八つのことなど、周辺の事物や子どもの生活を、ういいういしい感性で素直に表現した明るいつてもずい分多い。

だが、次のような詩がある。

木

お花が散つて

實^みが熟^うれて、

その實^みが落ちて

葉^はが落ちて、

それから芽^めが出て

花^{はな}が咲く。

さうして何べん